

Shakespeare の秩序観

山 際 巖

秩序の底辺

Julius Caesar の中で Brutus と Antony が群衆を相手にして演説する場面には、政治的大衆としての民衆にたいする Shakespeare の不信と嫌悪が明確にあらわれている。ここだけを読んでもそれは理解出来るが、劇全体を通してみればなおそれがはっきりする。Pompey を熱狂的に讃えたかと思えば（第1幕第1場における Marullus の憤慨を参照されたい）、やがて Pompey を滅して凱旋する Caesar を歓呼して迎える。Caesar を刺した Brutus に賞讃の声を送るかと思えば、Antony の煽動でたちまち Brutus を裏切り者と呼んで暴動を起こす。無定見、気紛れ、衝動性など、いろいろな好ましくない形容が彼らに当てはまる。

第3幕第3場では、反革命の暴動のなかで、彼らがいかに盲目的で兇暴であったかが示される。詩人の Cinna が彼らに殺されたのは、偶然 Brutus 一味に同じ名前の者がいたためであった。同一人物でなくても名前が同じだというだけで理由は十分だ（と暴徒たちは断言する）というわけで殺されてしまう。このようにして、この作品のテーマであるローマ共和制の死→独裁政治の誕生という過程のなかで、民衆の果たす役割はたいへん大きい。

民衆が政治的な存在として重要な役割を果たす作品には、その他 *Coriolanus* と *King Henry VI, Part II* の二つがある。これらにもまた彼らの政治行動にたいする Shakespeare の嫌悪ないし批判が、共通点としてあきらかに見られ

る。それが *King Henry VI, Part II* の場合には最もひどく、史上有名な Jack Cade の反乱が扱われているのだが、彼の人物も思想もすっかり戯画化されている。

これら三つの作品では民衆という存在が重要な役割を果たし、構成全体の欠くべからざる一要素をなしているが、われわれはその他にも彼らが mass として政治的に行動するいくつかの小場面を知っている。例えば *Hamlet* の第4幕第4場で、Laertes に煽動されて宮殿に乱入する民衆を見よう。Polonius の死をめぐる Denmark の国内では勝手な推測と噂がひろまる。前後関係から考えて、「Polonius を殺したのは Claudius だ」という噂であることが理解される。Laertes は父の死にかんする事情を詳しく確かめもしないで反乱を組織する。軽率な Laertes に従って宮殿に乱入した反徒たちは「Laertes がわれわれの国王だ」「Laertes を国王にせよ」と叫ぶ。彼らの考えは首尾一貫していない。殺人犯としての Claudius を廃位することと Laertes を国王にすることとの間に何ら脈絡はない。つまり Hamlet が王位の正当な継承者だからである。しかも彼らは Hamlet を愛しているのではなかったか。「Brutus をわれわれの Caesar にしよう」と叫んだ民衆がここで再び登場するのである。

われわれは Shakespeare によって描かれた民衆の別の姿をも知っている。*King Richard III* の第3幕第7場で、Buckingham によって間接的に描かれている市民たちの態度を想起しよう。市民たちを説得するための長い演説のあとで、Buckingham は彼らに「英国王 Richard 万歳！」を唱えよと要求する。しかし市民たちはただの一言も発しない。Buckingham の雄弁にもかかわらず、彼らは石塊か銅像のように黙り続ける。彼らの沈黙は、精一杯の抵抗である。Buckingham の高圧的な怒声と威嚇の結果、最後に10人ぐらいの者が「Richard 王万歳！」を叫んだだけである。このことについて Шведов は「民衆のきびしい沈黙はどんな言葉よりも雄弁に、残虐な圧制者にたいする非難を物語っている。だから彼らの眼には Richmond が圧政から彼らを救う者として映り、Richard の死は王位をめぐる陰謀の結果としてではなく、Richmond に共鳴する全英国人の抵抗の結果として理解されるのである」と指摘している。⁽¹⁾

ち Richmond の勝利は、単に反 Richard 勢力の勝利というだけでなく、圧政に抵抗する英国人全体の勝利という意味を受けとる。

最後にあげたこの例は Shakespeare が民衆を形象化する方法に矛盾があることを意味するのであろうか？ そうではないと私は思う。ここで描かれているのは民衆の積極的な政治行動ではなくて消極的「不服従」である。私はここで *Macbeth* において肯定的形象として描かれ、秩序の世界を代表している人物の一人 Macduff の言動を思い出す。Macduff を試すために Malcolm はあらゆる悪徳を自分自身にかぶせる。「こんな者でも支配者としての資格があるかどうか言ってくれ。わたしは今言ったとおりの人間なのだ。」Macduff は断固として答える。「支配者の資格どころか、[／] 生きる資格すらありません。」この対話に注目した J. K. Walton は、Macduff の信念が「Tudor 家および James I 世によって主張されたような、君臣関係の正統派的な理論と一致しない⁽²⁾」ことを指摘している。この反正統派的な忠誠観は Shakespeare の「思想」ではなく realism の所産であるように思われる。

Shakespeare が民衆の集団を mob として見るという顕著な傾向をとらえ、彼を性急に反動的とみなすのはアナクロニズムである。「進歩」とか「反動」とかいう言葉が最近はどこらかと言えば廃れてきたという感じがする。そういう概念は価値判断の基準としては流行遅れになったという気がする。それがよい傾向かどうかは別として「進歩」とか「反動」とかいう言葉は思考を粗雑にする危険があって私もあまり使いたくはない。) 彼の時代に、自覚のある組織的政治行動をする民衆の image を求めることは不可能であろう——形象化とは同時に発見でもあるから。形象化の対象がなかったというだけではない。16世紀のイギリス絶対主義は完成期にあり、強固な中央集権のみが英国の安全と平和と繁栄を保証した時代である。安定した社会的階層秩序をのぞむ Shakespeare と英国国民が、民衆の集団的政治行動をのぞましくないと考えたのは当然である。したがって、政治的大衆としての民衆を形象化する Shakespeare の方法は、絶対王制を支持し、feudal baronage に批判的であった彼の姿勢と首尾一貫している。

しかし以上の説明には但し書きが必要である。すなわち Shakespeare の作品に民衆が集団として政治的に登場する場合と、個人として登場する場合とを区別して考えねばならない。後者の場合、民衆にはしばしば機知あり善意あり勇気あり、独自の魅力をもつ人物が多いのであって、前者の場合とは対照的である。Spakespeare の歴史劇にあらわれる個人としての民衆は冷静で知的な時局解説者となることさえある。このとき彼らには Shakespeare の代弁者という名誉ある地位が与えられる。例えば *King Richard II* の第3幕第4場に登場する庭師もそうである。彼は一国の政治を庭の手入れに喩えて、Richard II の失政を批判する。彼は Richard の失政が没落の原因だったことを指摘するだけでなく、Bolingbroke の能力を肯定的に評価する。庭園に喩えられた英国は有毒の雑草 (Richard をとりまいていた寵臣たち) で満ち、良い草から養分を奪っていた。Richard はそれら雑草を保護する樹葉であったが、Bolingbroke はそれらを根こそぎにした。彼は Richard の没落と Bolingbroke の台頭が必然であることを示すことによってコーラス的な役割を果たしている。

Hamlet の墓掘人夫は機知に富んだ社会諷刺をする。Ophelia の水死は自殺だったにもかかわらず「クリスチアンとして葬られた」のは、死人が高い身分の者だったからである。人間が水にむかって進んで入水すれば自殺である。しかし「水のほうがそいつに近づいて溺らせた」とすればこれは身投げではなくて他殺である。これがお役人の論理であり検死の法律である。

「このような傾向は当時ほとんどすべての劇作家に見られたものである。すなわち身分の卑しい者が、気まぐれではあるが適切な、しばしば聡明な論評の手段として用いられる。Juliet の乳母、*King Henry V* の兵士たち、あるいは *As You Like It* の老 Adam など进行してみればよい。そしてしばしばこの論評は、*King Lear* の場合のように威厳を帯びるのである。」⁽³⁾

ところで、個人としての民衆にたいする好意と、政治的集団としての民衆にたいする嫌悪とは矛盾しない。つまりヒエラルキーへのきびしい要求と、個々の庶民にたいする貴族的寛容とは矛盾しない。このことは彼がどういう民衆を好意的に描いたかを分析すれば明瞭となる。彼は為政者たちをあるときは批判

的にあるときは肯定的に描いた。このことは彼の絶対王制支持そのものとは関係がなく、支持の方法に関係がある。同様に彼の描く民衆があるときは愚かで移り気であり、あるときは聡明であったとしても、そのことは彼が絶対王制を支持すること自体と何ら関係がない。絶対王制という前提の上に立って、彼がどのような為政者と民衆の理想像をもっていたか、ということが問題になるのである。

どんなに厳しいヒエラルキーを主張する者であっても、いや主張すればこそ、忠実な下僕や、分に安んずる勤勉な職人や、勇敢な兵士を愛するだろうし、彼らを暖かい眼でみるであろう。「Adam やそのほかいろいろな道化など魅力ある平民たちは、きびしい貴族主義的限界の中で愛されている。*As You Like It* のなかで Adam が称賛されるのは、社会秩序のなかにおける自分の地位をわきまえているからである。しかし、これらの人物が、*King Lear* における Oswald とか *Twelfth Night* の Malvolio のように、身分をわきまえず限界を越えるとき、あるいは Jack Cade のように伝統的な支配をおびやかすとき、たちまち Shakespeare の寛容と同情は消え失せ、不気嫌な諷刺が始まる。きわめて貴族的であり、Elizabeth 朝的な姿勢である。」⁽⁴⁾

このような態度はなにも Shakespeare 独自のものではなく、当時の庶民たちが自明のものとして受けとっていたものであり、彼らは Malvolio に同情する（これは現代人の感覚である）かわりに、作者と一緒に彼を嘲笑したにちがいない。すなわち、民衆は与えられた地位と身分に満足し、自分に課せられた身分相応の職責に忠実でなければならない。前にのべた *King Richard II* の庭師の例でもわかるように、秩序の枠のなかで自分の義務に忠実なものだけが、Shakespeare の代弁者たることを許され、社会と政治の批判が許される。民衆も、兵士も貴族も国王も、与えられたメカニズムのなかでそれぞれ与えられた機能を遂行せねばならないということが前提である。

秩序の頂点

ピラミッド型をなす社会的階層秩序の底辺が民衆であるとすれば、その頂点

は国王である。歴史劇を創作していた頃の楽天的な Shakespeare にとって、国王は法であり正義であった。*King Henry IV, Part II* 第5幕第2場を見よう。この場面は Lord Chief Justice と Prince Henry（今や coronation の直後であるから Henry V）とが和解する、いわゆる reconciliation scene であるが、ここには絶対主義における法と正義の観念——それが窮極的には国王に収斂するという——が典型的に示されている。法の権化であり、作者によって高潔な人物として好意的に描かれているこの判事がそれを説明してくれる。Chief Justice はかつて Henry V が皇太子のころ、彼を罰し投獄したことがある。新国王は「国王となるべき未来を背負う王子として、そのほうから受けたあのような侮辱をどうして忘れられよう？」と Chief Justice を非難する。後者の申し開きは次のとおりである。

I then did use the person of your father ;
The image of his power lay then in me :
And, in the administration of his law,
Whiles I was busy for the commonwealth,
Your highness pleased to forget my place,
The majesty and power of law and justice,
The image of the king whom I presented,
And struck me in my very seat of judgement ;
Whereon, as an offender to your father,
I gave bold way to my authority
And did commit you.

国王が地上における神の代理者であるとすれば、判事としての Gascoigne は法における国王の代理者である。Prince Henry がこのことを忘れて、判事席の彼を殴ったとき、Prince は国王を侮辱したのである。そして Gascoigne に委ねられた国王の権威に基いて Prince は投獄された。たとえ王子であっても、

もし法を無視すれば神の代理者に叛くことになる。新国王と Shakespeare は Gascoigne の所信と処置とを肯定し、正義の秤と剣とを引き続き彼に委ねる。

法と正義の象徴とされる国王に Shakespeare はどのような資格を要求したであろうか。Macbeth の中で、Malcolm は「国王にふさわしい美德」(king-becoming graces) として次のような徳目を列挙している。

As justice, verity, temperance, stableness,
Bounty, perseverance, mercy, lowliness,
Devotion, patience, courage, fortitude……

実にぜいたくな（つまりたいへん厳しい）要求というほかはない。しかも、この作品における Malcolm の地位と役割は、この言葉に重みを与えている。そしてすでに言及した Macduff の反正統派的忠誠観と併せ考えると、それはますます興味深い。

しかし上に列挙された美德は人物としての性格の範囲を出ない。さらに重要なのは社会的な機能である。農民も職人も、庭師も馬丁も、yeoman も商人も貴族も、全体としての階層秩序の枠組の中で、それぞれ自己の職責に励むことが要求される一方、他方ではそのよき指導者であることが国王に要求される。国民には国王にたいする忠誠が要求されるが、同時に国王にたいしてはそれに見合うだけの重い責任と能力が要求される。Shakespeare は Henry V という人物において国王の理想像を描いたが、その他の歴史劇では、望ましい国王の image が negative に表現されている。これこれのタイプはこれこれの理由で不適格——という方法で順次吟味の篩にかけたという感じがする。それは消去法と言ってもよい。

国王の責任が重いということの強調は Shakespeare の場合もう一つの見のがせない意味をもっている。王冠が重荷であること、国王の職責が大きな負担であること、それに比べると農夫とか牧夫たちの生活は平和で気楽なものである——こういう主張が彼の作品に何度か出てくる。Henry VI の同様な嘆きにつ

いてはすでに言及したことがある。ここでは Henry IV が病床にあるとき、その子 Prince Henry が王冠の重荷について語る言葉を聴こう。⁽⁵⁾

O polish'd perturbation! golden care!
That keep'st the ports of slumber open wide
To many a watchful night! sleep with it now!
Yet not so sound and half so deeply sweet
As he whose brow with homely biggen bound
Snores out the watch of night. O majesty!
When thou dost pinch thy bearer, thou dost sit
Like a rich armour worn in heat of day,
That scalds with safety.

Henry IV にとって王冠が「黄金の心労」(golden care)であった原因は何か。彼が王位篡奪者であったため、いつも罪の意識に苦しめられていたこと、また同じく篡奪者であったため、大貴族たちの絶え間ない反乱が起こったことである。ここでは国王としての職責の重さという一般論の他に、Henry IV が Richard II にたいして犯かした罪を自ら引き受けねばならないという応報と贖いも語られている。

Prince Henry が即位し、自ら王冠を戴いた後に、同じ問題について彼がどう考えるかを見よう。Agincourt の戦いの前夜、身分をかくして兵士たちと語りあった後で、彼は同じような嘆きをくりかえす。しかしここには前述の台詞⁽⁶⁾には見られなかった新しい内容がある。

The slave, a member of the country's peace,
Enjoys it; but in gross brain little wots
What watch the king keeps to maintain the peace,
Whose hours the peasant best advantages.

この場面では33行もの長い咏嘆にみちた独白が同じテーマにあてられている。それを要約すると次のようになる。あらゆる国民の生命も財産も、彼の妻子の幸福までもが国王の責任となる。「わたしはそれらすべての責任を負わねばならないのだ。」その反面、一般の人々に許されている喜びを、国王はどれだけ捨てねばならないか！ 国王だけに与えられたものは単に格式と儀礼にすぎない。その中味は尊敬でなく追従にすぎない。聖油も王冠も王笏も権標も、すべて安眠を奪うものでしかない。

国王は国の安全と平和のために夜もゆっくり眠らず心を碎かねばならない。一方その安全と平和を享受するのは民衆である。国王もまた、儀礼格式をとり除けば、民衆同様生身の人間であり、責任の重さを考えれば同情の対象ではあっても羨望の対象ではない。君主の不眠の努力によって保証される平和と秩序を享受する民衆のほうがむしろ幸福である。

Henry のこの独白には支配・統治・権力といった言葉ないしそのような趣旨の言及がない。人々を畏怖せしめるのは「儀礼・格式」であるが、民衆はこのような偶像がないためかえって国王よりも恵まれた状態にある。王位の実質は権力でなく責任であり、その表現される形式は偶像的な儀礼である。ここでは王位が権力として意識されていないし、観客にもそのようなものとして意識せしめない（——この点が肝心なところである——）という配慮がある。さらにまた深刻に庶民の生活をうらやむ君主の嘆きが、庶民である観客にどのような心理的反応を生ぜしめるかは明白である。君主にたいする（すなわち Elizabeth 女王にたいする）彼らの気持には畏怖とは異った情緒がつけ加えられる。これは絶対王制の巧みなプロパガンダであり、反動的な王権神授説をふりまわさない Shakespeare らしい方法である。

この台詞にはもう一つの側面がある。国王は自分の職責に忠実でなければならないという前提である。Henry VI が庶民の生活を羨んだとき、彼にはこの職責から逃れたいという強い願望があったし、事実、いつも義務を回避していた。それに反し Henry V は積極的にそれを引き受ける。そのためこの台詞の教育的効果はいっそう大きいものとなる。

法則の一元化

階層的秩序にたいする要請が最も鮮明にあらわれているのは

The heavens themselves, the planets, and this centre
Observe degree, priority and place,
Insisture, course, proportion, season, form,
Office and custom, in all line of order……

で始まる *Troilus and Cressida* における Ulysses の長い speech (第1幕第3場) である。あまりにも有名な台詞なので引用は省略するが、ここに述べられている思想は Shakespeare 独自のものではなく、Elizabeth 朝時代のあらゆる英国国民の思考と、言動の基礎に原理として存在していたものだとされている。

ここに見られる秩序の観念の組み立て方についてはあとでまた論ずるとして、*King Henry V* における Archbishop の台詞 (第1幕第2場) を紹介しよう。

Therefore doth heaven divide
The state of man in divers functions,
Setting endeavour in continual motion ;
To which is fixed, as an aim or butt,
Obedience : for so work the honey-bees,
Creatures that by a rule in nature teach
The act of order to a peopled kingdom.
They have a king and officers of sorts ;
Where some, like magistrates, correct at home,
Others, like merchants, venture trade abroad,
Others, like soldiers, armed in their stings,

Make boot upon the summer's velvet buds,
Which pillage they with merry march bring home
To the tent-royal of their emperor ;
Who, busied in his majesty, surveys
The singing masons building roofs of gold,
The civil citizens kneading up the honey,
The poor mechanic porters crowding in
Their heavy burdens at his narrow gate,
The sad-eyed justice, with his surly hum,
Delivering o'er to executors pale
The lazy yawning drone. I this infer,
That many things, having full reference
To one consent, may work contrariously :
As many arrows, loosed several ways,
Come to one mark ; as many ways meet in one town ;
As many fresh streams meet in one salt sea ;
As many lines close in the dial's centre ;
So may a thousand actions, once afoot,
End in one purpose, and be all well borne
Without defeat.

ですから天は国家を種々の職務にわかち、服従を目標と定めて、絶え間なくわれわれに努力させます。蜜蜂も同様な活動を見せてくれます。彼らは自然の法則によって秩序ある行動の手本を人間の王国に示しています。彼らには王もあり、さまざまな身分の職員役人がいます。ある者は行政長官として本国で刑罰を課し、ある者は商人として外国で取引をし、またある者は兵士として針で武装してピロードのような夏の蕾を攻撃し、陽気な進軍歌を奏しながら皇帝の天幕に戦利品を運んで帰ります。皇帝は君主としての政務に忙しく、歌をうたいながら黄金の屋根を築く石大工たちを、

蜜をこねる統治された市民たちを、狭い城門に重い荷を運んで群りくるかつぎ人夫たちを、あるいは不気嫌に怠け蜂を死刑執行人へ引き渡すきびしい表情の裁判官たちを、これらの者たちすべてを皇帝は監督します。つまり、さまざまな活動が、すべてある共通の目的に関連しながら、種々の方面で行なわれるのです。それはちょうど、あちこちから放たれた矢が一つの標的へ飛んでくるようなものです。それはまた多くの道路が一つの町に集まるのにも似ています。多くの河川が一つの海に流れこむのにも、多くの線が日時計の中心に集まるのにも似ています。このようにして無数の活動が、いったん開始すれば同一の目的に帰着し、失敗なく成し遂げられます……。

Archbishop of Canterbury のこの speech の背後には、国王に対仏戦争をけしかけるという動機がかくされているので、それだけ説得力が減じていると考えられなくもないが、「キリスト教国国王すべての模範 (the mirror of all Christian kings) である Henry V の肖像画を描くにあたって、good government にかんするこの説教を冒頭に置いた……⁽⁷⁾」という J. D. Wilson の指摘は首肯に値する。Archbishop の speech は、人間社会と蜜蜂の巣という analogy を含めて、Thomas Elyot (1499-1456) の著作 *The Governour* (1531) に基づいたものと言われているが、Shakespeare の考える理想的な政治の image をここにもうかがうことが出来る。国王を頂点とし、働き蜂を底辺とする階層的秩序のピラミッドは、彼にとって自明のものであり、自然律の如く動かし難いものであった。

社会の秩序と調和はまた同じ場面で音楽の和声にも喩えられている。

政治というものは、音楽と同様に、高・中・低と三つの部分に分けられますが、一つの和音となり、調和して自然な完全終止に到達するのです。

高・中・低 (high, and low, and lower) はそれぞれ alto, tenor, bass であ

るが、同時にそれらは身分と社会的機能の高低をあらわしている。このような analogy もまた Shakespeare の独創でなく、古く Pythagoras にまでさかのぼ⁽⁸⁾ることが出来ると言われるが、問題はもちろん analogy の古い新しいではなく、16世紀の英国というものを背景にした、この analogy の歴史的 content にある。

社会的諸身分諸機能は人体の諸器官にも喩えられる。例えば *Coriolanus* における Menenius の台詞を見よう。⁽⁹⁾

あるとき身体⁽¹⁰⁾の諸器官が胃袋にたいして反乱をおこして次のように非難した。「胃袋は身体⁽¹¹⁾の真中に坐って怠けているくせに、何もかも渦巻のように吸いこんでしまう。いつも食物を貯えこんでいるが、他の連中と一諸には労働しない。他の器官は見たり聞いたり工夫したり指図したり歩いたり感じたりする。互に助けあって身体全体の必要と欲求に奏仕するのに。」それにたいして胃袋は答えた。「……最初食物全部を受取るのはわたしだが、諸君はその食物で生きている。わたしは身体全体の倉庫でもあり工場でもあるのだから、それを受取るのは当然だ。諸君は忘れているかもしれないが、わたしは血液の河を通してそれを宮廷である心臓に送り、王座である脳に送っている。人体の曲りくねった通路や小部屋を通して、最も強い筋肉から小さな脈管にいたるまで、すべてわたしから自然の働きをなす能力を受けとるのだ。……わたしがめいめいに何を渡しているかすぐには理解出来ないかもしれないが、いつでもわたしは収支の報告が出来るし、諸君が最良の部分を受けとるのにわたしにはもみぐらしが残らないことを示すことが出来る。」

ここでは平民たちが手足や目、耳などに喩えられ、ローマの元老院は胃袋に例えられている。なるほど、文脈から言うと、Menenius が用いた analogy に適切でない点がある。Menenius の話によれば、身体⁽¹²⁾の諸器官は労働の報酬として胃袋から血管を通して栄養を受取るというのに、実際問題としては、諸器官に相当するローマの市民たちは飢えているからである。ここにみられる比

喩の稚拙さを観客はどう受けとったろう。むしろその稚拙さが観客にこれらの比喩の不合理を感じさせたのではないかという感想が湧かないでもない。しかし、おそらく「この場面を劇の冒頭に挿入したのは、主要なテーマを明らかにするという意図があったからである」という G. W. Keeton の説明は妥当かもしれない。⁽¹⁰⁾ ついでながら、このお説教の骨子は、社会に階級的矛盾は存在しないということであり、むしろ支配階級が社会の支柱であるというもので、現代でも命脈をすっかり失ってはいない。

国家の秩序ないし社会の制度は以上のように、あるときは蜜蜂の世界に、あるときは音楽の和音に、あるときは人体の組織に喩えられる。社会現象はいわば自然律によって説明される。蜜蜂は人間社会に “a rule in nature” (自然の法則) によって秩序ある活動を教訓するのであった。*The Elizabethan World Picture* には、国家の秩序が一方において大宇宙の秩序に対応すること、他方において小宇宙の秩序に対応することが詳述されているが、これもまた法則の一元化であるといえよう。

これらの対応について Tillyard が述べていることを要約してみよう。⁽¹¹⁾ まず国家の秩序は大宇宙の秩序の duplicate である。*Troilus and Cressida* のなかで Ulysses が ‘degree’ について述べる台詞は、両者間の (つまり body politic と macrocosm の) 対応を基礎として組み立てられている。この対応は単なる analogy 以上のものであり、広大な ‘network’ を形成している。だから Ulysses の言葉にも見られるように、天の混乱は地上の国家における内紛をひきおこすのである。逆にまた *Julius Caesar* とか *Macbeth* に見られるように、最高の為政者とか君主が殺害されるとき、天がそれに同調して混乱する。つまり国家の内紛が天変地異をひきおこす。国家の秩序は他方において小宇宙に対応する。国家の組織と諸機能は人体の組織と諸機能に対応するのである。

このように自然と人間社会を支配する法則はまったく同一のものとされる。両者は「対応の巨大な網によって結びつけられ」⁽¹²⁾ (connected by an immense net of correspondences) ており、いずれも同時に同次元の法則によって支配されている。法則のこのような一元化 (歴史法則と自然律との同一視) はど

いう意味をもっているのであろうか。

もちろん社会だけでなく自然も発展する。しかし、後者の発展速度は、前者の発展速度に比較すれば、静止していると言ってよい程緩慢である。例えば、**Shakespeare** の時代から今日までの間に人間社会はおそろしく発展し変化したが、生物学的な次元における人体の組織も蜜蜂の生態も変化していない。すなわち16世紀の英国人には、現存する体制が永久に不変であるという意識、ないし既成の社会組織が永久に不変であればよいという願望があって、それが諸法則の同次元化という形で表現されたのであろう。このような同次元化は既成の体制が新しい間は積極的な意味をもっているが、擁護せんとする体制が古ければ古いほど反動的となり不合理が露骨となる。

Macrocosm, Body Politic, Microcosm 相互間に対応の法則をみとめることが、中世以来伝統的な思考の型であるとしても、**Shakespeare** にとってその現実的な意味は必ずしも中世的ではない。国家とか社会のそのような解釈が **Tudor** 王朝の絶対主義を理論的に支えたことは明らかであるし、君権神授説と同様に封建貴族にたいして戦闘的な意味をもっていたことも容易に理解される。他方において **Shakespeare** にとって **Body Politic** とは **Papacy** との闘争の結果生まれた国民国家であり、その最高の支配者は市民階級と同盟した国王であった。だから思考の形式は伝統的であっても内容は変質していると言えよう。歴史は **convention** に還元されるものではなく、逆に **convention** を説明する（それが何故存続したか、あるいは何故消滅したかを説明する）ものである。つまり思想的な **background** には、さらにまたそれ自身の **background** があることを指摘したい。

絶対王制の確立は英国史の完成であり、その到達点である。そこまでに到る道程には神の意志さえ働いていた。歴史劇を創作した時代の **Shakespeare** は、いわば登りつめた歴史の頂点から、頂点に到る苦難にみちた道程を見下していた。一つの完成を目指して発展してきた諸過程・諸段階に、完成点から照明をあてていた。現在拠って立っている歴史的発展段階が、素材の選択と評価の基準であった。（選択という行為そのものの前提にも、すでに評価という作用が働

くことは言うまでもない。)「現在」は完成されたものであるから、これ以上変更は許されない。到達点であるから現体制が目的そのものである。社会の秩序を自然の秩序に喩える思想の根底には、そのようなオプチミズムが存在していた。

G. M. Trevelyan の英国史を読むと、われわれが *The Elizabethan World Picture* から受けとった image は多少修正される。Elizabeth 朝時代における安定と調和と自由という外観について、G. M. Trevelyan は次のように述べている。⁽¹³⁾「Elizabeth 朝時代の歴史と文学を研究すると、それに前後する時代に比較して、この時代にはより大きな調和と階級間のより自由な交流があったという印象を受けとる。……エリザベス朝時代の人々は、社会というものをありのままに受け入れ、自己意識もなく疑うこともせず、お互に交わっていた。

「階級的区分は騒ぎ立てることなく認められ、固定したものではなく、またきびしい世襲によるものでもなかった。財産を手に入れることによって、あるいはそれを失うことによって、あるいはたんに職業をかえることによって、個人も家族も一つの階級から他の階級へ移動した。……Tudor 王朝時代の英国では、中間的な階級や職業に属する人々が数も種類も多く、固定した境界線をひくことは不可能であった。それらの人々は、日常的な仕事と娯楽の中で、社会的地位が自分より上の人々ともまた下の人々とも密接に結ばれていた。英国の社会の基礎は平等ではなく、自由——機会の自由と個人的交流の自由——であった。これが Shakespeare の知っていた、そして彼が是認した、英国であった。あらゆる階級と職業の男女が彼の関心をそそった。しかし繁栄と幸福の必要な基礎として彼は「秩序」を擁護した。」

社会的諸機能には上下の区分が存在していて、人々はそれを自明のこととして受け入れたが、個々の人間はそれらの機能にそれほど縛りつけられていなかったということであろうか。そしてこのことを裏返して言えば（つまり主文と副文を逆にすれば）、個々の人間は階級から階級へとかなり自由に移動できたとしても、階級的区分そのものは秩序の骨格として守られていたということになる。

Shakespeare が当然のこととして受け入れ、また支持もした秩序は、その形

成から崩壊へ、発生から成長を経て死滅へという過程にあって、いわば壮年期から老衰期への過渡的段階にあった。ここに彼の幸運と不幸があった。彼が歴史劇を創作した時代には、イギリス絶対王制の矛盾はまだ潜在的であった。それが顕在化しはじめると、絶対王制のプロパガンダである歴史劇の創作は当然不可能となる。ところが、認識の歴史的な限界として、絶対王制以外の体制は Shakespeare の視野の中にはなかった。(*Julius Caesar* において彼が共和制の思想を支持していると思えるのは無理である。この点については機会をあらためて論ずる。) だから彼は現体制の存在理由を否定はできないのだが、同時に、その積極的プロパガンダも不可能となる。オプチミズムは姿を消し、彼の関心はむしろ次元の別な問題に向けられることになる。

君主主義の矛盾

Shakespeare の歴史劇には多くの矛盾が見られる。それらは ambiguity という性質のものではなく、対応する両極からなる諸矛盾の集合である。これまでもしばしば私はそのことを指摘してきた。S. C. Sen Gupta も *Shakespeare's Historical Plays* の中で Shakespeare の矛盾をいくつか挙げているが、私とは異った結論を引き出している。⁽¹⁴⁾ すなわち Shakespeare の主な関心は政治とか道徳にあったのではなく、彼は歴史を哲学的にでなく美学的に解釈したというのである。まずこの批評家の挙げている例から kingship に関するものを抜き出して見よう。

King John には royalism と nationalism との矛盾がある。もし議論を極端な結論にまで押し進めるならば、この劇は kingship にたいする諷刺になりかねない。その思想的な意味は Tudor 王朝の教義と相反する。つまりこの作品には「国王と国家の分離」(the separation of king and country) が見られ、royalism に関係なく nationalism が説教される。

John of Gaunt が英国を讃美する言葉は、裏を返すとその美しい国を破滅させようとする Richard にたいする批難となり、事実 John of Gaunt は Richard が廃位されても仕方がない国王であることを指摘する。これは、Bishop of

Carlisle の思想と矛盾する。それは “the necessity or desirability of deposing a bad king and the inviolability of his position and person” の矛盾である。

Bolingbroke が王座に登ろうとしたとき、Bishop of Carlisle は激しくこれを批難するが、あとになって Bolingbroke は Carlisle の振舞の立派さを認め、したがって間接的に Carlisle の議論が正しかったことを認める。また退位を渋る Richard の苦しみが生き生きと描かれているため、われわれは Shakespeare が Richard の廃位を sacrilege と見なしていると考えたくなる。しかし Earl of Essex に従う者たちが反乱の前日に *Richard II* を上演させたのは何故か。この劇が Bolingbroke による王位の篡奪を正当化していると考えたからである。それによく見るとこの劇では Bolingbroke が王位を奪い取ったというよりは、Richard が王位を譲ったというふうに描かれている。

ここで S. C. Sen Gupta は次のように結論する。要するに政治的正義の問題に Shakespeare は決定的な解答を与えていない。またそのような問題に関心を持っているとも思われない。彼の歴史劇は道徳の説教でもなく政治論文でもない。Bolingbroke を支持する Northumberland の言葉も、Richard を支持する Carlisle の言葉も、Shakespeare 自身のものではない。登場人物の思想は、彼らの性格の一部分にすぎない。劇作家もまた思想をもっているが、それは political なものではなく aesthetic なものである。Shakespeare の歴史劇に多くの矛盾が見られるのは、彼に一貫した政治的立場がないからである。彼にあるのは aesthetic な立場だけである。政治的な意味をもつ台詞もすべて登場人物自身のものであって、それは dramatic context からあるべき位置におかれている。これを Shakespeare 自身の言葉と混同してはならない。

このような見解に私は賛成しない。一般論として、登場人物の言葉と作者その人の言葉とを混同することができないのは勿論である。しかし Shakespeare の “dramatic emphasis of ideas”⁽¹⁵⁾ を知る手掛りはいくつかある。B. Stirling の挙げている諸方法については説明を省略するが、どの台詞に作者自身の思想が表現されているかを分析する場合の根拠を彼は示している。そのような分析を歴史劇に適用すると、Carlisle の王権神授説も Shakespeare 自身のもの、

John of Gaunt の Richard 批判および愛国的台詞も Shakespeare 自身のもの、したがって両者間の矛盾も Shakespeare 自身のものということが理解されるのである。矛盾と混乱があるということから、Shakespeare にはいかなる政治的立場もなかったと結論するのではなく、これらの矛盾を Shakespeare 自身の思想的ないし政治的立場の矛盾と考えるべきである。以上 S. C. Sen Gupta が列挙している諸矛盾については、すでにあれこれの機会に論じて来たので、ここでは別の一例を挙げてみよう。

Henry V はフランスへ攻めこむ前に Scroop, Gray, Cambridge などを反逆罪のかどで死刑に処する。彼らの反逆の動機は Edmund Mortimer を国王にしようというもので、York 家が王位要求の動きを見せはじめたのである。かつて Bishop of Carlisle の口をかりて王権神授説の立場から Bolingbroke を批難した Shakespeare は、ここでは Mortimer の王位要求の正当であることを意図的にぼかしている。すなわち国王の legitimacy よりも確立されている秩序のほうが大切なのである。だから、正統な王位継承権者を支持した Cambridge を死刑にする Henry V の処置は肯定的に描かれる。Cambridge 自身までが陰謀の発覚をよろこび、死刑の宣告を甘んじて受けながら、神が篡奪者の子 Henry⁽¹⁶⁾ の味方であることを認める。

But God be thanked for prevention,
Which I in sufference heartily will rejoice
Beseeching God, and you, to pardon me.

すなわち神は正統な王位継承権者を見捨て、その支持者たちは犯罪者とされる。Scroop もまた同様自分たちの行為が神の意志に反するものであることを認める。

Our purposes God justly hath discovered,
And I repent my fault more than my death……

そして神が Henry を加護していることを、観客は Henry とともに理解するのである。

We doubt not of a fair and lucky war,
Since God so graciously hath brought to the light
This dangerous treason lurking in our way
To hinder our way.

このような自己矛盾は、政治にいたする現実的な姿勢の結果であり、Shakespeare の弱味ではなく実は強みなのである。Shakespeare は国王の divine right を否定しない。⁽¹⁷⁾ 権力の divinity というイデオロギーは秩序の支柱だからである。しかし他方において、現に王位についている国王が正統の国王でなくてもこれに忠誠を尽くすべきであり、彼が good king であれば尚更である。それがたとえ bad king であっても事情によってはこれを支持せねばならない（例えば John 王の場合）。このような矛盾は、政治思想として理論的に表現できるものではないが、幸いなことに Shakespeare は劇作家であった。

注

かって私は、ある高校用国語教科書の教授用資料として、Shakespeare にかんする無署名の解説文を書いたことがある。その一部が加筆訂正されてこの論文の中に含まれている。

- (1) Ю. Шведов, *Исторические Хроники Шекспира*, pp. 65-66.
- (2) A. Kettle (ed.), *Shakespeare in a Changing World*, p. 113.
- (3) B. Stirling, *Populace in Shakespeare*, p. 57.
- (4) *Ibid.*, p. 82.
- (5) *King Henry IV*, Part II Act 4, Scene 5.
- (6) *King Henry V*, Act 4, Scene 1.
- (7) J. D. Wilson, *King Henry V*, Notes, p. 127.
- (8) *Ibid.*, p. 128.
- (9) *Coriolanus*, Act 1, Scene 1.
- (10) G. W. Keeton, *Shakespeare's Legal and Political Background*, p. 242.
- (11) E. M. W. Tillyard, *The Elizabethan World Picture*, pp. 82-84.
- (12) *Ibid.*, p. 77.

- (13) G. M. Trevelyan, *English Social History*, p. 162.
- (14) S. C. Sen Gupta, *Shakespeare's Historical Plays*, pp. 18-29.
- (15) B. Stirling, *Op. cit.*, pp. 45-54.
- (16) *King Henry V*, Act 2, Scene 2.
- (17) 拙稿「Shakespeare の nationalism」(『明治大学教養論集』第 46 号) pp. 53-54, pp. 56-57.